

体副形成子としての副助詞

丸 山 直 子

0. はじめに

副助詞の名付け親は、山田孝雄博士である。山田氏は口語の副助詞として、バカリ・マデ・ナド・ヤラ・カ・ダケ・クライを認めている [山田 (1922)]。係助詞が「用言の陳述の方法を修飾する」のに対して、副助詞は、「用言の意義即ち属性を支配する」ものである。また、副助詞特有の機能として、「ある語をうけて、その語句とそれとの結合体を以て情態の副詞と同じ意義と用法とに立たせることがある」ことや、「空くじばかりだ」のやうに、また「死ぬばかりだ」のやうに、全体として体言的に働き、断定辞「だ」でうけることが出来ることを特色とする」ことなどを指摘している。

水谷 (1991) では、いわゆる副助詞を体副形成子として規定している。副助詞の機能のうち、上に記述した、体言相当・副詞相当の表現を形成するという機能を重視し、接尾辞の一種とみなすことで、副助詞を辞から詞へ組み込もうとするものである。水谷 (1991) で体副形成子としているのは、クライ・スラ・ダケ・ナド・ノミ・バカリ・ホド・マデ・等・ナドナド・等々・サエである。

本稿の著者は、さまざまな構文環境に現れ得る副助詞のすべてを詞に組み込むことには無理があると考え、「副助詞」という名を残し、これを辞とする立場を取る。が、副助詞の接尾辞的側面は無視できず、むしろ、この接尾辞的側面が、副助詞と係助詞とを区別するものであり、副助詞を副助詞たらしめているものであると思われるので、本稿では、その副助詞の接尾辞的側面—体言相当・副詞相当の表現を形成するという機能—に焦点をあてて論じる。

典型的副助詞として、ここでは、マデ・バカリ・ダケ・クライ・ノミ・カ・ヤラ・ナドを考える。これは、山田氏が口語の副助詞としたものに、文語のノミを加えたものである (ノミは口語として復権した感がある)。この他にも、一般に副助詞と目せられるものはいろいろあるが、係助詞・接尾辞との境目が議論されるなど問題があるので、とりあえず、本稿では、対象外とした。

例文は、主に、国立国語研究所の『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』(1951) 及び水谷静夫氏のデータベース (文法DB1990版) から取った。それぞれ、頁番号とともに [国] [水] で示す。[水] については、更に次のような略号を使用する。

雁の：大佛次郎 雁のたより (中公版『鞍馬天狗』六)

言姦：筒井康隆『言語姦覚』中公文庫、原版1983

元首：中村正朝『元首の謀反』文春文庫、1983

猫：『我輩は猫である』(縮刷版漱石全集)

オ：オール読物

オ昭名：オール読物昭57七月増刊 昭和名作総集 (原形複製)

有馬：有馬頼義 三十六人の乗客 昭31-12 源氏：源氏鶏太 ホープさん 昭26-8
 井伏：井伏鱒二 増富の谿谷 昭16-1 子母澤：子母澤寛 さんど笠 昭6-9
 大佛：大佛次郎 一夜の出来事 昭27-8 高見：高見順 東京暮色 昭16-3
 川口：川口松太郎 鶴八鶴次郎 昭9-10 野村：野村胡堂 平次女難 昭8-12
 川端：川端康成 富士の初雪 昭27-12 林：林芙美子 幕切れ 昭23-2
 オエ：オール読物昭63増刊 昭和のエンタテインメント50
 国枝：国枝史郎 染吉の朱盆 昭2-1-1『サンデー毎日』
 佐々木：佐々木味津三 南蛮幽霊 昭3-3『富士』
 野村：野村胡堂 花見の留守 昭22-3『オ』
 浜尾：浜尾四郎 殺された天一坊 昭4-10『改造』
 山本：山本周五郎 藪の蔭 昭18-7『婦人倶楽部』

1. 副助詞の構文環境

副助詞は、さまざまな構文環境に現れ得る。近藤泰弘氏は、主な構文環境として次の七つを挙げ、それぞれの環境に個々の副助詞が現れ得るかどうかのチェック表を提示している〔近藤 (1983)〕。() 内は、例の文型である。

- 1) 形容動詞の連用形に後接する (きれいにー)
- 2) 格助詞に後接する (にー)
- 3) 体言に単独で後接する (子供ー)
- 4) 体言と格助詞の間に入る (子供ーが)
- 5) 体言と格助詞「の」(連体) との間に入る (子供ーの)
- 6) 体言と助動詞「だ」との間に入る (子供ーだ。)
- 7) 動詞連用形とサ変動詞との間に入る (読めーする)

実際にはこの他にも、例えば接続助詞の直後に現れる場合や、形容詞連用形の後に現れる場合などが存する。これらを、文構造上のカテゴリから整理すると、以下a) からg) のようになろう (構文カテゴリの名前は、水谷 (1983) (1991) を基にしている)。但し、すべての副助詞に一樣にこれらの用法が見られるわけではない。本稿で着目するのは、a) の用法であり、これについては2.で詳述する。

a) 体連語や情況語を形成する役割

体連語や句に付いて、体連語 (体言相当の連語) を形成する役割。上記3) 4) 5) 6) の用法がこれにあたる。うしろに【情況化】(副詞的修飾成分の資格を与えるもの—具体的には零記号 ε_5 やニの形をとる) が働くと、情況語 (副詞的連用修飾成分) として機能する。

体連語 \frown 副助詞 \rightarrow 体連語 { \rightarrow 情況語}

句 \frown 副助詞 \rightarrow 体連語 { \rightarrow 情況語}

「学校だけが教育する場ではない」〔国65〕

「顔色まで ε_9 変つたやうに思はれた」〔水 (『オ昭名』大佛264シタ)〕

(ε_9 は、格の無形表示)

「死ぬまで ε_5 仲よくしよう」〔国207〕

一般に係助詞にこの用法はないが、コソ・モには、コソガ・(不定詞 \frown) モガの形があ

る。

b) 【格表示】から導かれるもの

【格表示】とは、格助詞を中核とする助詞結合（等）の規則で、格助詞の後に来る用法（上記2）がこれにあたる。

格助詞^へ副助詞→格表示

「あんな奴とまで手を結んでいたとは知らなかった」[森田 (1989) 1076]

理論的には、格助詞が現れず、 ε_9 が存在すると考えられる場合（「彼まで来た」など）にも同じ構造が考えられるが、これは、a) の扱いに統一してよいと思う。つまり、「彼まで」で体連語が形成され、その後ろに ε_9 が付いていると捉えられる。従って、 ε_9 ^へ副助詞→格表示の構造は考えなくてよい。 ε_9 ^へX→格表示は、係助詞にのみ見られる用法ということになる（例：「万葉集 ε_9 は歌集である」）。

c) 【情況化】から導かれるもの

情況化助詞（ニ・ト→助動詞ダの連用形に近いもの）の後に来る用法。上記1）は、これに属する。（但し、情況化助詞という用語は水谷文法には存在しない。本稿の著者が名付けたものである。）

情況化助詞（ニ、ト）^へ副助詞→情況化

「こんなにまで思ってくれている」

これも理論的には、情況化助詞の現れない形、つまり ε_5 ^へ副助詞→情況化 が存在し得るが、b) の場合と同じく、副助詞までで体連語が形成されて、それに ε_5 が働いているとみなすことができよう（その場合、体連語は情況語に転成したものと見なされる）。 ε_5 ^へX→情況化は、係助詞にのみ見られる用法ということになる（例：「やがて ε_5 は国際間の問題となる」[国191]）。

d) 句結合子の構成要素

接続助詞の後に付いて、句結合子を形成するものである。

接続助詞^へ副助詞→句結合子

「自分の生命を賭けてまで正義を守ろうとする」[沼田 (1986) 113]

係助詞にまで範囲を広げれば、バコソ・カラコソなどがあるが、副助詞の範囲では、接続助詞はテに限られるようだ。

e) 接続助詞テと動詞特類（いわゆる補助動詞）の間に割って入っているもの

用連語^へテ^へ副助詞^へ動詞特類→用連語

「寝てばかりいる」[水 (伊藤桂一：草の声『藤の咲くころ』72)]

「意気消沈してなどいられない。」[水 (笹沢左保：威光『オ』'90-4 137シ)]

f) 述素に割って入っているもの

用言系の述素につくもので、スルを分化する。上記7) に相当する。

述素／用／^へ副助詞^へスル→述素

「会議の議題に取り上げます」[沼田 (1986) 188]

「せかしなど致しませんから、丁寧にやってくださいよ」[森田 (1989) 856]

一般に副助詞はこの環境に現れにくい。係助詞の例としては、「逃げてくれさえすれば」などがある。（近藤氏は、この用法は係助詞のみの用法であると言っている[近藤 (1983)]。）

g) 述態辞に割って入っているもの

たとえば、次のような形のもの。

助動詞^へ副助詞^へ助動詞^へ述態辞 「君子でなどない」

述素／相／^へ副助詞^へアル／ナイ^へ句 「美しくなどない」

これも、副助詞にこの例を見つけるのが難しいものである。係助詞においては、一般的な用法。係助詞が陳述に関わり、副助詞が属性に関わるということを反映しているといえよう。但し、f) 同様、副助詞に全く見られない用法というわけではないので、ここにとりあげた。

2. 体連語や情況語を形成する役割

2.0 副助詞が体連語や情況語を形成するとみて良いか否か

副助詞が体言や副詞相当の表現を形成するということに対して、異をとなえる立場がある。沼田善子氏は、副助詞のついた形が連体修飾表現を受けないことから、副助詞が体言相当の表現を形成するとは言えないと言っている（例えば、「電球だけが寒そうに光っていた」という表現の「寒そうに光っていた」を前にもって行って「寒そうに光っていた電球だけ」という表現にしたとき、「寒そうに光っていた」は「電球」までしか修飾しえず、「電球だけ」を修飾することはできないことを指摘している）[沼田 (1986)]。しかし、連体修飾表現を受けないということと、体言相当の表現（以下体連語とよぶ）でないということとはイコールではない。連体修飾を受けるということは、体連語を性格づける要素の一つに過ぎない。体連語を性格づける要素を以下に挙げてみよう。

- 1) 格助詞を従え得る
- 2) 連体助詞ノを従え得る
- 3) 助動詞ダを従えて、述格に立ち得る
- 4) 連体修飾を受け得る

2) の中には、助動詞ダの連体形相当のもの（時枝文法では、助動詞ダの連体形と考えるであろうもの）も含まれる。例えば、「若者ばかりの町」（「若者の町」と比べると、「この町は若者だ」とは言えないが、「この町は若者ばかりだ」とは言える）。助動詞ダの連体形相当のノを従える用法は、当然のことながら、3) に近い用法といえる。2) であれば即体連語かというところでは言えない。ある種の副詞も、ノを従えて、連体修飾表現を形成する。例えば「せっかくのお誘い」など。3) についても、助動詞ダを従えて述格に立つものが体連語とは限らない（ある種の副詞・連体詞なども立ち得る。これらを水谷文法では、転化述語と呼ぶ）。1) と4) は、「1) ならば体連語」「4) ならば体連語」と言えた（活用語が格助詞に直接付くものを、体言化したものと捉えるなどして）としても、「体連語ならば1)」「体連語ならば4)」とは言えないものである。例えば「凶星」という体言は、2) 3) の性格は有するが、1) 4) の性格は持っていない。従って、連体修飾表現を受けないからと言って、体連語でないという証拠にはならない。ちなみに、水谷文法では、体連語0は連体修飾を受け得るが、体連語1は連体修飾を受け得ないように設定しており、体副形成子は体連語1を形成するものとして規定してある[水谷 (1991)]。

次に、副詞相当の表現をつくるという側面について考えてみる。水谷文法の用語では、

情況語ということになるが、副助詞が体連語を作ったり情況語を作ったりすると考えるより、まず体連語が形成され、その転用として情況語としての用法があると考えるのが妥当であろう。時・数量を表す体連語（「今」「～した場合」「三冊」など）と同じである。後ろに【情況化】が働いた場合に情況語になる。一般に【情況化】の具現化した形は、情況化助詞ニ・トや ε_5 である。副助詞がついてできた体連語の【情況化】の形は、ニと ε_5 に限られる。

2.1 体連語か情況語か

うしろに【格表示】か【連体化】か述態辞（助動詞列、零記号 ε_1 を含む）がある場合（2.0の1) 2) 3) に該当する）は体連語、【情況化】がある場合は情況語と考える。具体的な形態としてそれらを列挙すれば以下ようになる。

体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの—tt

直後が格助詞・ ε_9 のもの —tt格

直後がノのもの —ttノ

直後がダ・ ε_1 のもの —ttダ

直後が副助詞カのもの —ttカ

体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの—tj

句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの—kt

直後が格助詞・ ε_9 のもの —kt格

直後がノのもの —ktノ

直後がダ・ ε_1 のもの —ktダ

直後が副助詞カのもの —ktカ

句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの—kj

文に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの—bt

文に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの—bj

副詞に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの—hj

情況語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの—jj

一度体連語ができて、それが情況語として転用されるというのが、基本的な考えであるが、hj・jjは、情況語としてしか用いられない。1. で述べたa) からg) までの枠組み以外に項目を設けるべきかも知れないが、情況語として働くものを形成するという点では同じなので、ここに含めた。hj・jjが他と異質である事を指摘するにとどめる。

実際には、格助詞のニか情況化助詞のニかの見分け、零記号が ε_9 なのか ε_5 なのかの見分けが難しい。決め手になるような事柄については、各論で述べる。以下、各副助詞について、上記分類に従って、意味との関わりにも言及しながら詳述する。

2.2 各論

2.2.1 マデ

マデの表す意味は“範囲”（「三時まで働いた」）と“強調”（「君までそんなことを言うの

か)に二分して考えることができる(近藤(1983)による)。前者(あるいは前者の一部)を格助詞とする人もいるが、これらは本来一つのものである。副助詞は、マデに限らず、他の辞と結合して慣用的な表現をつくる場合が多い[祢津(1990)]し、実際には、そこから派生して様々な意味を担っているが、ここでは、意味そのものの議論というより、構文的ふるまいの差を見る(マデの場合、“強調”の解釈を取り得る文法形式は限られているなど、意味によって構文的ふるまいに差が見られる)ために、大まかな、上記“範囲”“強調”の意味分類を採用する。他の副助詞についても方針は同様で、基本的に近藤(1983)の意味分類を採用した上で、話をすすめる。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格-直後が格助詞・ ε_9 のもの

「多摩川までが東京都です」[森田(1989) 1074]

「顔色まで ε_9 変つたやうに思はれた」[水『オ昭名』大佛264シタ)] カ格

「自分の子供まで ε_9 産んだ女だ」[水『オ昭名』川端276ウへ)] ヲ格

意味には“範囲”“強調”どちらもあり得る。

ttノ-直後がノのもの

「Dまでの距離」[国206]

tt格と違うのは、“強調”の意を表さず、“範囲”のみを表すということである。

次の例は、助動詞ダの連体形に近い用法である。

「死んでしまえばそれまでのはず」[水(阿刀田高:長夜短日『オ』2-1 115シタ)]

「死んでしまえばそれまで」を「の」が受けている。

ttダ-直後がダ・ ε_1 のもの

「乗せて流れていつまで ε_1 か」[水(35歌謡曲「むらさき小唄」佐藤惣之助)]

「ここまでだ」「まずはご挨拶まで ε_1 」

意味は、ttノと同じく“範囲”のみ。

AカラBマデの形で、範囲の始まりと終わりを示すものがある。例えば、

「前菜からデザートコースまで」[国207]

AからBマデ全体で体連語を形成していると言える。「前菜からデザートコースまでを食べた」とあればtt格、「前菜からデザートコースまでの料理」とくればttノ、「前菜からデザートコースまでだ」であればttダということになる。

tj-体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

【情況化】の形としては、ニ・ ε_5 の両方があり得る。

「秋まで ε_5 延してよい」[国207]

「三時半までに帰らなけりゃならないのよ」[国207]

これらは、前にくる体連語が時を表すものであり、“範囲”を示すものだが、ニを伴うか ε_5 を伴うかで、意味に差が生じる。

前にくる体連語が場所を表すもの場合には、【情況化】の形は ε_5 である。

「アフリカまで ε_5 きて」[国206]

これらは時に格助詞として扱われるが、格を表すとは認めがたい。「本を背の高さまで積み上げる」は、「本を背の高さだけ積み上げる」との比較からわかるように、分量の

“範囲”(の限界)を表す表現として考えられる。場所へマデも、場所に関する“範囲”(の限界)を表すと考えられる。

前にくる体連語が時・場所以外のものもある。

「その長さの半分くらいまで ε_5 大体同じ深さにぬい」[国208]

「係まで ε_5 お申出てください」[国206]

「先生は出席簿順に林さんまで ε_5 当てた」[森田(1989) 1075] (順番の限界)

上記は【情況化】の形が ε_5 のもの。最後の例は、「出席番号順に」がなければ、“強調”の用法も考えられ、その場合には、 ε_5 でなく ε_9 (ヲ格)が想定される。

下に示すのは、【情況化】の形がニのものである。

「参考までに示す」[沼田(1986) 187]

「それまでに幕府が弱体になってみるとは」[水(『オ昭名』大佛250ウへ)]

直後に ε_5 がくるものの中には、AカラBマデの形で、範囲の始まりと終わりを示すものがある。例えば、

「5時から8時まで ε_5 は、電熱器を使わないで下さい」[国207]

時

「すみからすみまで ε_5 埋もれてみえる」[国207]

場所

「出席簿順にAさんからBさんまで ε_5 当てる」

順番

これらは、AカラBマデ全体で、情況語としての役割を果たすと言える。

また、次のような表現もある。

「だから私は何処まで ε_5 も折れて出てゐるんです。」[水(『オ昭名』川口104シタ)]

「いつまで ε_5 もじっと黙りこんでいました」[国207]

不定詞(ドコ/イツ)へマデへモで、慣用的な表現をつくっている。

tjとして用いられるときの意味としては、すべて“範囲”。

kt一句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格一直後が格助詞・ ε_9 のもの

「出かけるまでが大変だ」

上の例は、句へマデで、時の範囲の限界点を示している。

句へマデへモへナイ、句へマデへノへコトへハへナイの形で、慣用表現をつくる。

「共産党とはあい容れないことはいうまで ε_9 もない」[国208]

「いうまで ε_9 もなく「米国対日援助見返資金特別会計」である」[国208]

意味は、“範囲”。

ktノ一直後がノのもの

「協定成立に至るまでのソ連の態度の急変」[国207]

「そんなに高いのなら、買わないまでのことだ」[国207]

上は、句へマデで、時の範囲の限界点を示しており、下は、慣用的な意味を担っているものの例である。意味はともに“範囲”。

ktダ一直後がダ・ ε_1 のもの

ktノと同じ類のものを受けて表現をつくる。

kj一句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

【情況化】の形としては、ニ・ ε_5 の両方があり得る。

「僕が行つて来るまで ε_5 、この話を怪談風に人に話さないで下さい。」

[水 (『オ昭名』井伏100シタ)]

「追手を繰出すまでには、手間もかからうし」[水 (『オ昭名』大佛252シタ)]

これらは、句マデで、時の範囲の限界点を示しており、 tj の場合と同様、ニと ε_5 では意味が違う。

時を表すものでなく、またニと ε_5 の両方を使えるものに、次のようなものがある。

「完膚なきまでに批判し去っている」[国208]

“比況”の意を担うと言えるかも知れない。

また、句マデモで慣用表現をつくる。接続助詞に似た働きである。

「竜之助が温かい人になることができないまで ε_5 も、お徳のような温良な山の女を冷たい人にはしたくないものです。」

[水 (中里介山：大菩薩峠 白根山の巻『オ』元10増刊402ナカ)]

これらはすべて大まかに言えば、“範囲”に属する。

hj —副詞に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「こうまで ε_5 口を出されるんじゃ」[水 (伊藤桂一：藤の咲くころ92)]

意味的には、“強調”である。

“強調”の解釈が可能なのは、 tt 格と hj のみである。“範囲”の解釈は、慣用的表現も多く、時・場所に関する基本的なものから、“比況”のようなものまで、意味が多岐にわたっている。時・場所を表す体連語マデの直後の零記号は ε_5 、句マデニのニが格助詞なのは直後の動詞がスル・ナル系のものに限られる、といえそうである。

2.2.2 ダケ

ダケの表す意味は、“程度”（「特別会計にそれだけの負担を加重する」[国64]）と“限定”（「学校だけが教育する場ではない」[国65]）に二分して考えることができる。

tt —体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt 格—直後が格助詞・ ε_9 のもの

前が数量を表す体連語の場合には、“程度”“限定”両方の可能性がある。

「子供に千円だけ ε_9 持たしてやった」[森田 (1989) 634]

指示語マデで数量を表す体連語をつくることもある。「それだけを負担する」デモという係助詞がつく場合は、“限定”に限られる。「千円だけ ε_9 でもください」以下の例は数量以外で、“限定”を表すもの。

「学校だけが教育する場ではないのである」[国65]「形式だけ ε_9 整っても」[国65]

「孫だけ ε_9 でもつれてきなさい」[水 (秋竜山 (漫画の吹出し)『オ』2-1 133)]

ダケアルで慣用的表現をつくる。ダケの意味としては“程度”。

「天才画家瀧沢栄二君の作だけ ε_9 あって、こりやすばらしい標本図だ」[国64]

tt ノ—直後がノのもの

前が数量を表す体連語の場合には、“程度”“限定”両方の可能性がある。

「千円だけの負担」「特別会計にそれだけの負担を加重する」[国64]

前が直接数量を表さなくても、全体として数量を表すものがある。

「お頼みだけのことはしましたよ」[水(『オエ』野村125ナカ)]

数量でない、“限定”の例としては、「官僚だけの教育でもなく、」[国65]

ttダ―直後がダ・ε₁のもの

ttノと基本的に同じものが述格に立ち得る。「千円だけだ」「官僚だけだ」

tj―体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

【情況化】の形は基本的にε₅。ニをともなつてダケニになると、後述のように慣用的意味を担う。

前にくる体連語が数量を表している場合、数量の“程度”を表す。“限定”の可能性もある。

「一台のほかに、二、三名だけε₅はみ出すと、」[水(『オ昭名』有馬416ナカ)]

「太陽の光の量だけε₅は違っていて、」[水(笹倉明：漂砂『オ』2-1 238シタ)]

指示語が前にきて、全体として“程度”を表す表現を作る場合もある。

「民主主義のほんとうの意味を知っている人が、どれだけε₅あるだろうか」[国64]

“限定”を表す例として、

「夏の間だけε₅は牛乳、山羊乳などで補い、」[国65]

などがある。この例は時を表すものである。

数量・時の表現以外に、慣用的表現として、次のようなものもある。“程度”から“理由”を表すようになった。接続助詞的。必ずダケニの形で用いられる。

「理解を必要とする事柄だけに、冷静な、慎重な態度で検討してもらいたい」[国65]

kt―句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格―直後が格助詞・ε₉のもの

「学制上の形式を整えるだけで教育の内容もこれにともなつて向上すると考えることは大いなるあやまりである」[国65]

「この事を世に知らせるだけでも、この録音は特ダネ以上の価値がある」[国65]

意味は“限定”。デは助動詞ダの連用形とも考えられるが、格助詞デが表す具格を広く考えれば、ここに属する。

tt格の場合と同じく、ダケアルで慣用的表現となっているものがある。ダケの意味としては“程度”。

「若いだけε₉あつて、さすが体力がある」

ktノ―直後がノのもの

「口のあたりが不自然にひきつっただけのことでした」[国65]

「鶴子を連れただけの水入らず」[水(『オ昭名』川口112シタ)]

「さうした椅子に就くだけの力量」[水(『オ昭名』高見74ウへ)]

「文句は、するだけのことをしてから後にしろ」[水(『雁の』41シタ)]

上記は、助動詞ダの連体形相当。意味的には“限定”(上二つ)“程度”(下二つ)の両方あり得る。

ダケノコトハアルで、慣用的表現をつくる。ダケの意味としては“程度”。

「会議を開くだけのことはあった」[国64]

ktダ―直後がダ・ε₁のもの

「われわれは法律や習慣や礼儀の許す範囲において、われわれの好きなことを言ったり、行ったりすることができるだけである」[国65]

意味は“限定”のみ。

kj-句に付いて、全体として情況語としてふるまっているもの

tj同様、【情況化】の形は基本的に ε_5 ・ニをともなうダケニになると、後述のように慣用的意味を担う。

「好きなときに好きなだけ ε_5 一方的に燃料価格などを値上げはするが、」

[水(『元首』上184)]

量の“程度”を表す。分・カギリで置き換えがきくようなもの。

デキル〜ダケという形で、一つの副詞相当の表現をつくる。

「発言して頂く機会をできるだけ ε_5 作る」[国64]

慣用的な表現として〜バ〜ダケという表現がある。〜バ〜ダケ全体で、情況語を構成している。

「金をもうければもうけるだけ ε_5 、人間がいやしくなるのが一般である。」[国64]

“限定”を表す慣用的な表現として次のようなものがある。

「ま、話を、きくだけ ε_5 はきいてやってくださいませんか」

[水(伊藤桂一：藤の咲くころ150)]

tjと同様にダケニの形がある。“程度”から派生した“理由”の意味。

「初めてであるだけに特に注目される」[国65]

ε_5 を用いると、意味が変わる(「初めてである分」という意味になる)。

体連語としてふるまう場合にしても情況語としてふるまう場合にしても、数量表現をつくる場合には、“程度”と“限定”と両方の可能性がある。慣用的な表現として、〜バ〜ダケ・ダケアルや、“理由”を表すダケニなどがある。〜バ〜ダケや時を表す体連語〜ダケの直後の零記号は ε_5 、句〜ダケ〜ニのニが格助詞なのは直後の動詞がスル・ナル系のものに限られる、といえそうである。

2.2.3 バカリ

バカリの表す意味は、“程度”(「半分ばかり入っていた」[国201])と“限定”(「窓の外ばかり見ていた」[水(『オ昭名』有馬417ナカ)])に二分して考えられる。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格一直後が格助詞・ ε_9 のもの

前に来る体連語が数量表現の時、概数を表す。“程度”の用法である。

「操車場の西方二キロメートルばかりにある麦が刈り取られた直後の六平方キロメートルほどの耕地が」[水(『元首』下70)]

以下は“限定”を表すもの。

「独身の社員ばかりが十人ゐて」[水(『オ昭名』源氏223ウ)]

「富士山ばかり ε_9 見てゐてもつまらないわ」[水(『オ昭名』川端280シ)]

下の例について、「富士山を見てばかりゐても」にしても意味的に等しいことを水谷氏は指摘し、「情況語として扱ふ積りである」と言っている[水谷(1991)]が、構文的

には、体連語としてふるまっているとみてよいと思う。

ttノ・ttダは、tt格と同じ類のものを受けて表現をつくる。

ttカー直後がカのもの

「犬ばかりか猫も」

AばかりかBで表現を形成している。Aばかりで体連語が形成され、それとBをカが結んでいると捉えることができる。ばかりかを接続助詞的な複合辞として捉えることも可能であろう。

tj一体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

【情況化】の形はε₅である。数量規定の表現をつくる。意味は“程度”。

「半分ばかり ε₅入っていた」[国201]

kt一句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格ー直後が格助詞・ε₉のもの

「勝利を喜ぶばかりでは済まされない」[水(『元首』上191)]

“限定”のみ。

次の例は、“程度”から派生した“比況”の例。

「手をとらぬばかりにして奥へ導いていった。」

[水(山本『日本婦道記』小説全集1 102)]

“程度”からアスペクト“寸前”を表すようになったものとしては、以下のようなものがある。

「すっかり荷づくりをして、運び出すばかりになっている。」[国202]

句末が「た」なら、アスペクト情報として“直後”を表す。

ktノー直後がノのもの

kt格と同じ類のものを受けて表現をつくる。ノはダの連体形に近い。

「勝利を喜びばかりのチームメート」

“程度”から“比況”に転じたものとして、

「権藤は、鞍馬天狗の方へ向きなほるばかりの剣幕で」[水(『オ昭名』大佛258ウへ)]

「まことに不思議なおたずねだといわんばかりの顔をする」[国202]

“直後”のアスペクト情報を示すものとして、

「銀行から引出したばかりの現金」[国203]

ktダー直後がダ・ε₁のもの

kt格・ktノと同じ類のものを受けて表現をつくる。

ktカー直後がカのもの

AばかりかBの形のものである。

「しゃべらないばかりか、初めはひた隠しに隠してやがんだ。」[国202]

kj一句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

“程度”から派生した“比況”の例として次のようなものがある。

「胸がはりさけるばかりに悲しい」「見とれるばかり ε₅美しい」

【情況化】の形は、ニとε₅の両方があり得る。

また、同じく“程度”から派生した“原因”を表すものとしては、

「労働組合がこれを拒んだ許りに、社会民主党閣僚の総退陣が起り、それが結局民主主義の敵のために道を開く機縁を作った。」[国202]

のようなものがある。必ずバカリニの形で用いられる。

バカリは、数量を表す体連語につく場合に“程度”を表し、体連語としても情況語としてもふるまう。句につく場合には派生的意味が強くなり、“比況”“原因”“寸前”“直後”といった意味を担う。引用のトを受けて、トバカリ_{ε5}・トバカリニの形で、“比況”の意を表すこともある。句へバカリへニのニが格助詞なのは、直後の動詞がスル・ナル系のものに限られるようである。

2.2.4 クライ

クライの表す意味は、“程度”（「三十八度くらいの発熱」）と“強調”（「風くらいなんでもありません」）に二分して考えられる。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格一直後が格助詞・_{ε9}のもの

数量を表す体連語に付いて、おおよその数量を表す体連語を形成する。“程度”の用法。

「私は四十くらいからやっと物になり出した」[森田 (1989) 395]

「なにしろ、大きな家くらい_{ε9}もある巨象なんだからね」[国42]

指示語が付いておおよその数量を表す場合がある。体言に限らず、連体詞にも付く。

連体詞についているクライは、助詞でなく、名詞とすべきかもしれない。

「これくらい」「このくらい」

数量を表す表現でも、語気を強めるなどすれば、“強調”の用法となる。

数量以外で“程度”を表す例としては、

「切腹くらいで堪忍できぬような気もするが」[水（『雁の』212シタ）]

“強調”をとることもできる。“強調”の典型的な例は、

「そんなことくらいでぼくに内幕まで打ちあけるなんて……………」

[水（大岡玲：表層生活『文春』元2-3 423ウへ）]

「われらにかわって裁判されているのだという気持くらい_{ε9}はあってもよいのではないか。」[国42]

“程度”“強調”どちらにもとれる場合が多い。

直後が副助詞のものもある。

「半分くらいまで_{ε5}大体同じ深さにぬい、」[国41]

ttノ一直後がノのもの

tt格と同じ類のものに付いて表現をつくる。

「八十名くらいの当選を目標とし、」[国41]「風邪くらいのことで休むな」

ttダ一直後がダ・_{ε1}のもの

“強調”の用法はなさそうである。

「感度幅が20°～30°くらいなので、」[国41]

「起きているらしいのは、～と、～と、～と、～と、左側二つ前の、これも入れ替った二人の男くらいであつた。」[水（『オ昭名』有馬419ウへ）]

tj-体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

“程度” “強調” とともに表す。

「一さじくらい ε_5 御飯粒をいれておまじりにし、」 [国41]

「どのくらい ε_5 、かかりますかしら」 [国41]

“程度” を表す際、比較の基準を示すものとして、

「早場米が昨年くらい ε_5 早く出れば好転すると思う。」 [国42] のような例がある

「お内儀さんぐらい ε_5 やかましい人はないね」

[水 (杉本苑子: 春のうららの十万坪『オ』 2-2 43ウへ)]

上記の例は、～クライ～ハナイの形で慣用表現となっている。

kt一句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格－直後が格助詞・ ε_9 のもの

“程度” “強調” とともに表す。

「むかしならった清元をさらうぐらいが、らくの唯一の気晴らしと思われた」

[水 (安西篤子: 『オ』 201 77ウへ)]

上の例は“程度”を表すと思われるが、「むかしならった清元をさらうぐらい ε_9 いいでしょ?」になると、“強調”の意味を表す。

「実家と縁が切れるくらい ε_9 は、さして悲しむにも及ばないではないか」

[水 (『オエ』 山本51ウへ)]

上の例を、水谷 (1991) では情況語として考えているが、「実家と縁が切れるくらいヲ悲しむ」と解釈すれば、体連語と捉えてよいと思う。

ktノ－直後がノのもの

kt格と同じ類のものに付いて表現をつくる。ノは助動詞ダの連体形に近い。

「一台分に少し足りない位の客で、」 [水 (『オ昭名』 有馬416ナカ)]

上の例は、数量の“程度”を表す。

「岡田が何をするかと云ふと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。」 [水 (森鷗外『雁』 壹)]

ktダ－直後がダ・ ε_1 のもの

kt格・ktノと同じ類のものを受けて表現をつくる。

「すみからすみまで埋もれてみえるくらいなのでした。」 [国41]

は、“程度”、

「そんな事を言うくらいだから、あいつ何をしでかすか分らない。」 [国42]

「今におよんであわてて二年制の短期大学を作るくらいなら、最初から四年制大学と併行して二年制大学を設ける方法を構すべきであつた。」 [国42]

は、“強調”を表す。～スルグライナラは、慣用的になっている。

kj一句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

【情況化】の形にはニと ε_5 の両方がある。“程度”を表す。

「60才を超した老人とは思えないくらい ε_5 きれいです」

「しみじみ中学生に還りたいくらいに昔がなつかしい」 [水 (『オ昭名』 源氏233ウへ)]

bt一文 (引用) に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

クライ特有の用法である。“強調”を表す。

「無意味な日だぐらい ε_9 、ほくにだってわかってるからね。」

[水 (阿久悠: 家族囃子『オ』2-2 130ウへ)]

bj-文 (引用) に付いて、全体としては状況語としてふるまっているもの

【状況化】の形はニ。

「私は自分の浅智恵から、御奉行様はあの煙草屋彦兵衛の為に一室にこもって供養をなさっていらっしゃるのだ位にしか考えませんでした。」

[水 (『オエ』 浜尾555ナカ)]

～ニ考える・～ニ思うの形。ニ格と考えて、btにすることも可能。

“程度”を表すと考えられるが、“強調”ととれなくもない。

クライの意味分類は、他の副助詞に比べても、より、連続的なものである。語気など、運用論的な要素が利いてくる。

2.2.5 ノミ

意味は“限定”。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格-直後が格助詞・ ε_9 のもの

「共産主義のみを批判しているわけではなく、」[国171]

ttノ-直後がノのもの

「巨大独占資本のみの救済のため」[国179]

ttダ-直後がダ・ ε_1 のもの

「今のところ、できているのはタイトルと第一幕の幕あきのシーンのみである。」

[水 (『言姦』128)]

ノミナラズで慣用表現をつくる。～ノミナラズ全体で状況語として働いている。

「われわれのみならず一般に認められるところである。」[国179]

tj-体連語に付いて、全体としては状況語としてふるまっているもの

「三冊のみ読む」のような表現が存在すればここに属するが、あまり一般的とは言えない。

kt-句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格・ktノも理屈の上では存在するはずだが、一般的とは言えない。

ktダ-直後がダ・ ε_1 のもの

「共産党あるのみである。」[国171]

「お徳は後に残ったのみでなく、蔵太郎をつれて～奈良田の温泉へ行ってしまうした。」[水 (中里介山: 大菩薩峠 白根山の巻『オ』元10増刊400シタ)]

「それなくして個人は生きられぬのみならず、社会もまた、それなくして存在しえぬであらう」[国180]

kj-句に付いて、全体としては状況語としてふるまっているもの

存在しないのではないと思われる。

ノミの用法は、復権してきたとは言え、かなり狭いと言えよう。「着のみ着のまま」のような慣用的な表現もある。

2.2.6 ナド (ナゾ・ナンカ)

意味は、“例示”と“強調”。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格―直後が格助詞・ ε_9 のもの

“例示”の意味を担うものとして、次のようなものがある。

「庭にバラの花などを植えた」

並列表現（並置体連語）を前にとることがある。

「会社、古物商、飲食店などを筆頭に」[国132]

また、特に他物の存在を前提としない以下のような用法も“例示”として考える。

「十一代さんなんぞは、君、十三人もお側室があつて、子供が三十八人も、生れたつていふからね」[国132]

“強調”の例としては、

「ボーイ・フレンドのジェリイの事など ε_9 忘れてしまうのほせ方だ。」[国133]

「個人の誠実などといふものがなにほどの力も発揮しえぬことを、」[国133]

「強いられた結婚なんか ε_9 、したくありませんわね、やっぱり。」[国133]

などがある。

ttノ―直後がノのもの

tt格同様、“例示”“強調”両方の用法がある。

「ヨークの切替えなどのギャザーは、」[国132]

「サラシ木綿、ネル、毛布などの必需品を、」[国132]

ttダ―直後がダ・ ε_1 のもの

「熱雷か渦雷か或いは風塵などである」[国132]

“強調”の用法はなさそうである。

tj-体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「高田砲兵連隊に研究のため出張したときなど ε_5 、砲兵の号令がおぼえられないので」
[水（児島襄『参謀』上13）]

「スカートが三枚接になっているときなど ε_5 は、」[国132]

以上は時の“例示”。【情況化】の形はニと ε_5 の両方。

「西独の通貨改革、ソ連のベルリン封鎖、西欧側の空輸対策、北大西洋条約の成立など ε_5 、めまぐるしい情勢の変化の跡を顧みると、」[国132]

この用法は議論のあるところである。「西独～成立」という表現が「めまぐるしい情勢の変化」の例示をしていることは確かで、これはむしろ、体連語 ε_3 体連語の形に落とすのがよいのではないかと思う。 ε_3 とは、【連体化】に現れる零記号である。

kj-句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「～ができ、～もでき、また雷雨予報の精度を向上できるなど ε_5 、資する所は極めて大きいものといわねばならない」[国132]

tjと同じ議論があるものである。“例示”。【情況化】の形は ε_5 。

bt-文（引用）に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

「足跡を残そうなどという意味はもちろん持っていない」[国133]

「税務署は泥棒に甘い、身内意識があるのでは、などという悪口は言わないけれど。」

[水 (『言姦』 151)]

「私は決してロマンチックな夢物語だなどとは申しません。」[水 (『元首』 下186)]
意味的には“例示”“強調”両方がある。

後ろに引用を示す助詞トが付いているものがここに属する。

bj-文 (引用) に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「そんな関数は存在するか、一意的か、などε₅あまり初心者向けではない議論をせねばならず、」[水 (『百定』 97ヒダリ)]

tj・kjと同じ問題がある。

引用表現と密接な関係にあるのが、ナドの特徴と言えよう。

2.2.7 ヤラ

意味は“不定”。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格-直後が格助詞・ε₉のもの

「なんのことやらε₉分らない」[国225]

不定の体連語が前にくる。

ttノもttダも理論的には存在するはずだが、あまり一般的でない。ヤラそのものが、現代語であまり使われないうえ。

tj-体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「何やらε₅秘密めいた小暗い木立など」[国226]

不定の体連語につく。

ktの用法は一般的でないと思われる。

kj-句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「スミス君は毎日何をしているやらε₅、いっこうに学校に顔を出さない」

不定の句を受ける。

hj-副詞に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「どうやらε₅道をまちがえたらしく」[国226]

「ピエロは、どうやらε₅着つけがすんだ。」[国226]

「いつの間にやらε₅手をあげたり、足踏みしたりして、心から融けこんで歌っていました。」

[国226]

ヤラは、カと似たふるまいをするが、用法が狭い。一方、「～はどこへやら」の形で、情況語を形成したり、トヤラの形で体連語を形成してほかというなど、カに見られない用法もある。

2.2.8 カ

意味は“不定”。

tt-体連語に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

tt格-直後が格助詞・ε₉のもの

「何かをささやくように」[国11]「何のことかε₉呑み込めない。」[国11]

「どうしたら術がとけるのかε₉わからない」[国11]

不定の体連語を受ける。最後の例は、準体助詞ノによってできた体連語 (ノ体連語)

を受けている。

「～と言ってもよいか_{ε9}も知れない」[国11]

これは「かもしれない」で複合辞を形成しているともとれる表現である。

並列表現を作ることもある。

「好きなのかきらいなのか_{ε9}少しも判らないのだ」

[水(林芙美子: 晩菊『オエ』457ナカ)]

「東独軍同士の交戦か、東独軍とソ連軍との交戦かを大至急究明せよ」

[水(『元首』上201)]

ttノ・ttダは、tt格と同じ類のものを受けて、表現をつくる。

tj-体連語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「いくらか_{ε5}狂いが出ますから、」[国11] 「いくらか_{ε5}しゃくれ顔で、」[国11]

「気のせい_{ε5}か、顔色がすこし蒼ざめてさびしそうで」[国11]

「思いなし_{ε5}か純子さんの瞳は、きらきらと濡れているように私には思われた。」[国11]

「一瞬にして目が利いたものか_{ε5}揉み手をいしい板場から顔を出して」

[水(『オエ』佐々木142ウへ)]

最後の例を、水谷(1991)では挿入として扱っている。

「いくらか」のように不定表現を受けるものもあるが、上の例のように、それ自体では不定表現でないものと結合して不定の情況語をつくる。これは、体連語としては働かないという点が、今まで見てきたものと違う。

kt-句に付いて、全体としては体連語としてふるまっているもの

kt格-直後か格助詞・_{ε9}のもの

「彼女は自分がなにを祈ろうとしているかを思いかえし」[水(『オエ』山本49シタ)]

「俺が何しに旅へ出たか_{ε9}知つてる筈だ」[水(『オ昭名』子母澤62シタ)]

不定の句を受ける。

並列表現を作る例は以下の通り。

「正方形に配置するか長方形に配置するかに就いての関心」[国12]

「血が雑っているか雑っていないか_{ε9}、真ッ先に調べてもらうことにしよう」

[水(『オエ』国枝423シタ)]

カドウカ・カ否カで体連語として用いられる。

「司法修習生の修習を終えたか否かという規準」[国12]

ktノ・ktダは、kt格と同じ類のものを受けて、表現をつくる。

kj-句に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「なんだか_{ε5}ひどくねむたくなってきました。」[国11]

「なんだか」は、体連語として使われることはない。

「いつだつたか_{ε5}、兎に角、暑い頃に逢つた男だつたわ」[水(『オ昭名』林175ナカ)]

「そのうちに誰が言つてやつたか_{ε5}、町役人が、見回り童心を伴れてやつて来ました」

[水(『オ昭名』野村42ウへ)]

「戸をあけるかあけないかに、勢よくネコがとびこんで来た」[国12]

「在るか在らぬかに低く呟いたが、」[水(『オ昭名』大佛250シタ)]

カドウカ・カ否カで情況語として用いられる。

「果して減税が行われるかどうか_{ε5}、国民一般の関心と期待を集めている」[国12]

hj-副詞に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「なぜか_{ε5}涙があふれて来て、しかたがなかった」[国11]

不定の副詞を受ける。

jj-情況語に付いて、全体としては情況語としてふるまっているもの

「二十四歳の若さのためか、彼の使命感はあくまでも昂揚していた」

[水(『元首』上22)]

水谷(1991)では、これを挿入として扱っている。

カは、不定表現を受ける点や並列表現をつくる点でヤラに似ているが、ヤラよりもずっと用法が広い。水谷文法では、末カ連語として扱っている。終助詞としての役割、挿入との関係も問題になる。「どこからか_{ε5}ふしぎな音が聞こえてきた」のように、格要素について、情況語をつくるような働きもある。

3. まとめ

副助詞の機能の一つとして、体言相当の表現や副詞相当の表現を構成するという機能に着目し、特に、いかなる場合に体言相当表現(体連語)としてふるまい、いかなる場合に副詞相当表現(情況語)としてふるまうかの条件について見てきた。ここで、意味との対応も見ながら、一覧表にすると、次頁のようになる。

意味的に色上げ作用をするという点では、どのような構文環境に現れようと同一役割を担うと考えるべきであるが、構文的にみれば、うける構文カテゴリ・形成する構文カテゴリで、1. で述べたa) からg) や、a) に対しては更に上のように、整理することができる。また、副助詞によって表される意味を細分して考えれば、構文環境によって、担う意味に差があることがわかり、文法形式から意味を探っていく際の手がかりにできそうである。

本稿では、体連語や句に副助詞が付いて体連語を形成し、それがそのまま体連語としてふるまう場合と、【情況化】が働いて情況語としてふるまう場合について、個々の副助詞のふるまいを見ることで検討した。体言相当の表現を形成するという点では、橋本文法の準体助詞・松下文法の名助辞との関係が、副詞相当の表現を形成するという点では、橋本文法の準副助詞・松下文法の副助辞との関係が、それぞれ気になるところである。更に一般の接尾辞との関係も含め、別稿に譲りたいと思う。

[参考文献]

- 近藤泰弘(1983)「副助詞の体系—現代日本語—」『日本女子大学紀要』32。
柁津仁美(1990)「辞結合における慣用表現の文法的考察」『東京女子大学日本文学』74。
沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』第2章、凡人社。
水谷静夫(1983)「国文法素描」『朝倉日本語新講座3文法と意味1』第一章。
水谷静夫(1991)『稿本 国文法大体』。
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店。
山田孝雄(1922)『日本口語法講義』宝文館出版。

	マデ		ダケ		バカリ		クライ		ノミ	ナド		ヤラ	カ
	範囲	強調	程度	限定	程度	限定	程度	限定	限定	例示	強調	不定	不定
tt													
tt格	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ttノ	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
ttダ	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	×	△	○
ttカ	—	—	—	—	×	○	—	—	—	—	—	—	—
tj	○	×	○	○ ニ(理由)	○	×	○	○	△	○	×	○	○
kt													
kt格	○	×	○	○	×	○	○	○	△	○	○	△	○
ktノ	○	×	○	○	○	○ (比況) (aspect)	○	○	△	○	○	△	○
ktダ	○	×	×	○	○	○ (比況) (aspect)	○	○	○	○	○	△	○
ktカ	—	—	—	—	×	○	—	—	—	—	—	—	—
kj	○	×	○	×	○	×	○	×	×	△	×	○	○
			ニ(理由)			(比況) ニ(原因)							
bt	—	—	—	—	—	—	○	○	—	○	○	—	—
bj	—	—	—	—	—	—	○	○	—	△	×	—	—
hj	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○
jj	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	○

ttからkjまでは基本的な用法。このうちttカはバカリだけの用法。

bt・bjはクライ・ナドの、hj・jjはマデ・ヤラ・カの特有の用法。

(まるやま なおこ 本学専任講師)